地域活性化を目的としたスポーツイベントの開催経緯と課題

Process and issue of sports event aimed at regional vitalization

1K10C075-0　海老原 未星
主査 木村和彦 先生　　副査 原田宗彦 先生

【目的】

2013 年９月７日にアルゼンチンのブエノスアイレスで行われた第 125 次 IOC 総会において、2020 年のオリンピック開催都市が東京に決定された。オリンピック開催にあたりスポーツ施策の見直しや新たな取り組みがなされている。その中で特に注目を浴びているのが、スポーツツーリズムの分野である。日本におけるツーリズムの発展は、1964 年の海外渡航の自由化を契機としており、50 年足らずの歴史しかない。今後の市場規模拡大が期待され再び日本経済が発展するための１つの鍵と考えられている。また近年全国各地ではスポーツによる町おこし、地域振興が多々行われている。実際に土地を訪れることにより地域特有の魅力を感じることができる参加型のスポーツイベントの人気が伸び、誘致や開催の事例が増えている。しかし地域活性化を目的として開催されているスポーツイベントの全てが成功を収めているわけではない。その要因の１つとして、スポーツイベント開催に関するモデルケース事例や情報の蓄積が不足していることが挙げられている。スポーツイベント参加者に関する研究は多くなされているが、需要サイドだけではなく供給サイドの課題解決が要される。そこで本研究ではこれまで中心的ではなかった大会主催者側の視点で、何を意図してどのような取り組みをしたのか、そしてどのような結果に繋がったのかを明らかにすることによって、今後の地域振興を目的としたスポーツイベント運営への提言とする。

【調査方法】

群馬県の北部に位置する沼田市、片品村、川場村、昭和村、みなかみ町の１市３村１町が含まれる利根沼田地域で開催されるサイクリングスポーツイベントの「望郷ラインセンチュリーライド」を事例にし、大会主催者である望郷ラインセンチュリーライド実行委員を務める利根沼田県民局行政事務所の職員を対象に、半構造化されたインタビューを行うことで調査をする。

インタビュー項目は

（１）なぜサイクルイベントを開催することになったのか

（２）この大会の魅力とは何か

（３）大会の課題と展望

の３つに設定する。

【結果】

（１）大会発足の７年前に、農業用道路である望郷ラインが開通。しかし思うように利用者が増えず、観光面を含めた利活用を検討するため委員会が設置されることになった。また第一回大会が開催された 2011 年には群馬県全体をあげた観光キャンペーン、ディスティネーションキャンペーンが行われることになり、地域の特色を活かしたイベント開催が決定された。利用者の伸び悩む道路の利活用、そして地域の良さを知ってもらうイベントを催すことの２点から、望郷ラインセンチュリーライドの開催が決定した。

（２）大会の特徴としてあげられるのが、４種類用意されているコースとエイドステーションの存在である。コースに設定されている望郷ラインは高低差があり達成感を得るに十分なだけでなく、参加しながら楽しむことのできる豊かな自然環境も有している。また休憩所の役割をするエイドステーションでは毎年地域で収穫された農産物や名産品を用意しており、参加者アンケートで高い評価を得ている。

（３）宿泊を伴う参加の増加による地域への経済効果の発生がより期待されており、県外だけでなく国外からの誘致にも前向きである。しかし大会の未来にはまず継続という問題が生じてくる。地域イベントというのは現在のように県が主体的に行うのではなく、主管を地域に移して運営できるようにしなければならないが、その目処が立っていないのが現状である。

【考察】

インタビューを通じて、「地域の特性を生かし満足感・充実感を与える」「地方自治体におけるスポーツ行政の見直し」の２点が今後のスポーツイベント運営にあたり重要な点となってくると考えられる。今日多く存在するスポーツイベントとの差異化を図り参加者数を確保するためには、地域特有の魅力を活用し価値を上げる必要がある。また多くの地方自治体がスポーツイベントの誘致に関心が強いものの実現に至らない要因には施設などのハード面、人材のソフト面、財政面の３つに分けられる。これまで国民体育大会などスポーツイベントを支えてきた文部科学省だけでなく、ツーリズムを振興する観光庁による地方自治体への多面的な支援が求められる。